

1.はじめに

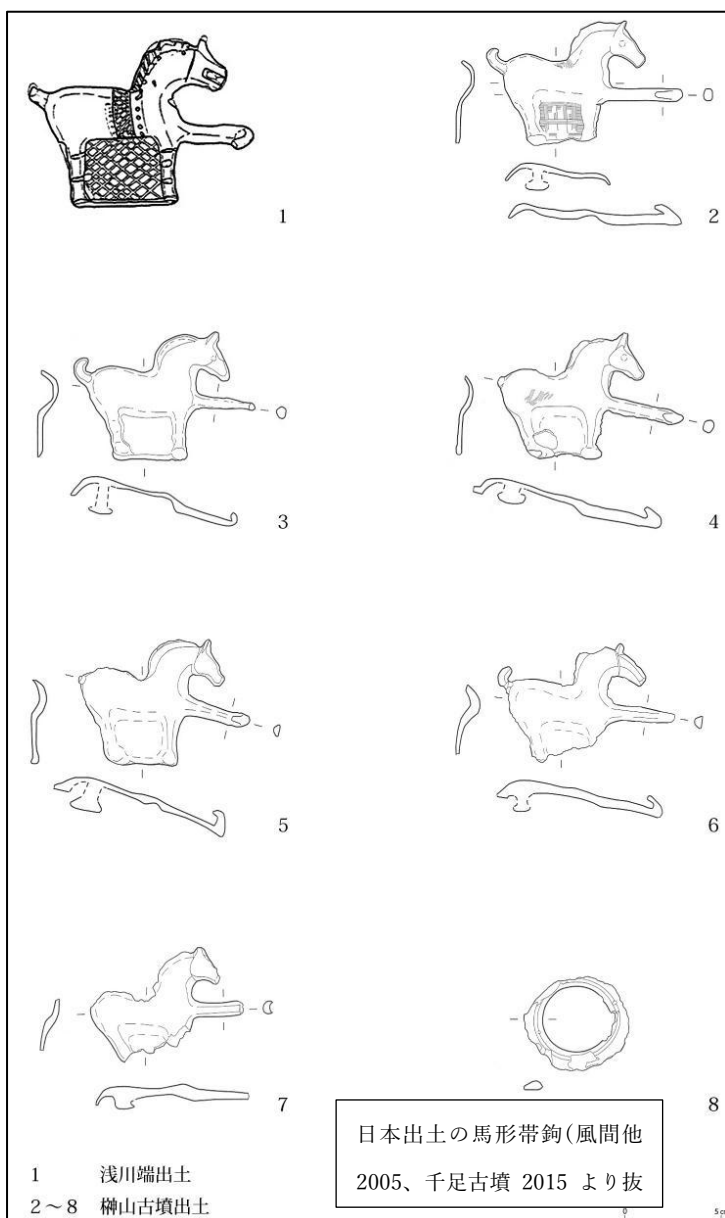
造山古墳の陪塚といわれる榊山古墳から出土したとされる馬形帯鉤についての考察は、かつてから多く散見されるが、榊山古墳が 5 世紀前半であり、また古墳への馬具副葬は 5 世紀から本格化することから、5 世紀の出土品として扱われてきた。今回の考察では、馬形帯鉤が邪馬台国時代に伝世した可能性について論じる。

2.従来の馬型帯鉤の論考の検証

馬形帯鉤についての近年の論考では、なみはや歴史講座 第 76 回 2016.08.19 レジュメとしての「海を渡った馬形帯鉤」柳本照男(NPO 理事・大阪大学非常勤講師)がよくまとまっている。以下長い引用。

「韓半島の原三国時代から三国時代にかけて、木棺や木槨、ときには住居から馬形を模った青銅製の鉤具（バックル）が出土している。一般的に馬形帯鉤と呼称され、韓半島東南部(嶺南)地域から中西部(京畿道・忠清道)地域にかけて分布域が存在する。日本でも 37 例(風間栄一 2006)ほどが知られているが、出土遺跡が確認されている例はほとんど無く、僅か長野県浅川端遺跡出土の 1 点のみである(風間栄一・清水龍太 2005)。またほぼ確実に視される例としては、岡山県榊山古墳または千足古墳出土とされているもの 6 点が挙げられる程度で信憑性に欠ける遺物として扱われて来た経緯(永嶋 1988)もあるが、浅川端遺跡出土例が示すように日本においても確実に存在する遺物であることが裏付けられ新たに研究の門戸が開かれた資料である。」(柳本照男 2016)

日本国内でも 37 例も存在しながら、長野県浅川端遺跡出土の 1 点以外は、出土地が確定できないことから、考古学的には非常に論じにくい状況にある。しかし伝・榊山古墳出土品については、千足古墳との混同は疑われるものの、一定の考察が行われている。



1 浅川端出土
2~8 榊山古墳出土

日本出土の馬形帯鉤(風間他
2005、千足古墳 2015 より抜)

「榊山・千足古墳出土品 この2古墳は1913年ごろの同時期に発掘されたもので、馬形帯鉤は榊山古墳出土品として報告されている（和田千吉1919）。しかし、当時から2古墳の出土品は混在しており、近年改めて出土地等の確定調査が行われたが、両古墳のいずれかに決定することはできなかった（福尾正彦2006、2015）。そこで、ここでは両古墳名併記で記しておく。」（柳本照男2016）

馬形帯鉤は最近、韓国清堂洞墳墓群で大量20個が発見され、その時代区分が解明されつつある。出土地は原三韓時代の馬韓と後の新羅にあたる辰韓領域に集中域がある。浅川端遺跡出土品(1)は。型式はB1cタイプでⅢ-3期に該当し、清堂洞5号墓などに類例が存在するとされる。また榊山・千足古墳出土品は1個の文様構成はⅡ-2型式(2)、3個の文様構成はⅢ-3Cb(3,4,5)、2個の文様構成はⅢ-3Cc(6,7)とされる。

また榊山・千足古墳出土品には環状青銅製品(8)も1個ある。Ⅰ型式の馬形帯鉤漁隱洞出土品には環状青銅製品が伴うから、同様のもので、Ⅱ-2型式の馬形帯鉤に付随する可能性が高い。

「以上、出土地が明らかな7点について型態上の整理を行った。その結果、浅川端遺跡出土品は製造時期がⅢ-3期(4世紀3/4)、榊山ないしは千足古墳出土品はⅡ-2期(2世紀後半～3世紀初頭)とⅢ-2～3期(4世紀2/4～3/4)であることが明らかになった。」

次に「造山古墳群と東北アジア—榊山古墳出土品を中心に」(岡山市埋蔵文化センター定期講座2018年資料)では、宮内庁書陵部の土屋隆史が論じている。

概略としては、馬形帯鉤は朝鮮半島南部で紀元前1世紀頃から4世紀後半頃にかけてみられた、馬の形の金具であり、中国の琵琶形帯鉤の影響を受けて出現。鑄造で朝鮮半島南部の東南部と中西部に多く分布し、両地域の特徴に違いがある。(朴章鎬2011)

東南部地域 陰刻文様(蜜蝋原形に文様を刻む) 紀元前1世紀～紀元後2世紀にかけてみられる。

中西部地域 陽刻文様(鑄型に文様を刻む) 紀元後2世紀～4世紀後半にかけてみられる。

馬形帯鉤は東南部地域の影響を受けて出現した可能性が高く、伝榊山古墳例の陰刻文様があるものは東南部地域に由来し、文様が無いものは東南部、中西部の両方で確認される。編年的には、東南部で馬形帯鉤が確認されたのは紀元前1世紀～紀元後2世紀頃までで、榊山古墳の年代である5世紀とは大きな時間差がある。

つまり伝榊山古墳例の馬型帯鉤は、邪馬台国時代の伝世である可能性もあることになる。朝鮮半島で伝世されていたのか、早くに榊山古墳とその周辺に搬入されたのかは不明だ。

3.東潮の馬型帯鉤の論考

国立歴史民俗博物館研究報告第151集(2009年3月)の「『三国志』東夷伝の文化環境」で東潮は馬形帯鉤を論じている。①『三国志』東夷伝「序」の論理②東夷伝諸種族の境域と東夷伝の地理観③夫餘の境域④高句麗の境域⑤濊の境域⑥韓の境域⑦倭の境域⑧東夷伝と戦争、の目次でわかるように、東夷伝に出てくる古代遺跡の最近までの発掘調査を網羅して、新たな論考を加えている。我が国での邪馬台国論争に、魏から倭国に通じる経路の考古学的知見は不十分であったが、それを補うものだ。

2012年3月25日刊行の「邪馬台国の考古学—魏志東夷伝が語る世界」(東潮・角川学芸出版)では、上記論文を大胆に解説しており、その中で馬形帯鉤を論じている。

「馬形帯鉤は二世紀後半に出現し、三世紀代に盛行し、四世紀に消滅する。馬韓、弁韓、辰韓の三韓と倭に分布する。天安清堂洞遺跡で大量に馬形帯鉤が出土した。その分布は馬韓（天安清堂洞墳墓群、安城仁智洞、清州松岱里墓群、鳳鳴洞墓群）、辰韓（慶州朝陽洞墓群、永川漁隱洞、星州礼山里墓群、尚州新興里墓群、城洞里墓群）、弁韓（金海亀旨路墓群、良洞里墓群）、倭（長野浅川端、伝岡山榊山古墳）と三韓と倭の地域にひろがる。その分布圏は辰王の統治圏であり、韓と倭の交流にかかわってくる」（東潮）

「馬韓諸国は帶方郡治の近辺から南へと記述されている。伯濟国は漢江流域のソウル付近の風納洞土城が忠臣である。その南に速廬不斯国、日華国、古誕者国、古離国、怒藍国の国々があり、月支国につづく。つまり漢江から遠くない南に、月支国が存在するのだ。牙山湾沿岸の天原（現在の安市・天安郡）・礼山地域と推定されている。その地域で知られる同時期の遺跡が清堂洞遺跡である」（東潮）

清堂洞遺跡は忠清南道天安の南の丘陵地帯で、最近開発が激しいようだが、周溝墓が発見されており、最大の20号墓は三世紀前半、まさに卑弥呼時代。馬形帯鉤の元に為ったという漢系の曲棒形帯鉤が出土。2号墓では鉄製曲棒形帯鉤も出土。馬形帯鉤は5号墓（11個）、7号墓（2個）・9号墓・16号墓で合計20個出土で5・7・9号墓は二世紀後半、16号墓は三世紀後半とされる。馬韓と辰王の関係が考古学からも解明されつつある。

「月支国は牙山湾沿岸、天安一帯に存在したのであろう。辰王墓もいずれ発見されることもあるだろう。藩王は三韓の王として、二四七年ごろ帶方郡との戦争のなかで消えてゆく。倭の卑弥呼も二四八年ごろ没した。韓の辰王と倭の卑弥呼は同時代に生きた王であった。」（東潮）

4.馬韓と辰王、邪馬台国の関係

三国志の「魏志」韓伝には、

「弁辰韓合二十四国，大国四五千家，小国六七百家，総四万户，其十二国属辰王，辰王常用馬韓人作之，世々相継，辰王不得自立為王」

とある。辰王は馬漢人で十二国を統括するが、自ら立たずとはいわば、選挙されるようなものだろう。三韓の鉄の交易支配の市場理事長みたいなものかもしれない。

『魏略』には、

「明其為，流移之人，故為馬韓所制」

とあり、流移の人だというのだから、馬形帯鉤の存在からは、騎馬民族出辰であったかもしれない。江上波夫の騎馬民族征服王朝説では、「流移の人」辰王は騎馬民族出身とした。ただ当時、馬韓領域の馬形帯鉤は余り知られていなかっただろう。もちろん江上波夫は伝榊山古墳の馬形帯鉤も古墳時代のものと考えていただろう。

『後漢書』韓伝には

「馬韓最大，共立其種為辰王」

とあり、卑弥呼と同じように「共立」されるという。この時代に三韓では臣智という支配階級があり、その間での互選であったかもしれない。とはいっても辰王は「魏率善邑君・歸義侯・中郎将・都尉・伯長」などを魏に倣って与えており、一定の支配体制が構築されている。

5.馬韓の反乱の経緯

238年（景初二年）に魏の司馬懿が遼東の公孫氏を滅ぼしたとき、魏は秘密裏に楽浪・帯方に水軍を送り接收した。いわば公孫氏は韓半島の交易圏を先に取られたわけであり、此の時、楽浪を通して邪馬台国の卑弥呼が魏に使節を送った可能性もある。此の時朝鮮半島中部にいた辰王の勢力も温存されたと思われる。卑弥呼の邪馬台国は辰王の仲介無くして魏との通行も出来なかったのではないか。この後卑弥呼は魏に朝貢して親魏倭王となり、鏡百面などを受け取ることになる。

だが数十年間韓半島の交易を仕切っていた公孫氏が亡び、半島から倭にかけての交易ルートは混乱していたはずで、また邪馬台国は狗奴国とも交戦していた。私は狗奴国=東倭=大和とみて「吉備邪馬台国東遷説」を立てたが、馬韓の辰王、ひいては馬形帯鉤の存在は興味深い。このあたりの経緯を整理しておこう。

238年（景初二年）5月司馬懿。遼東に到着。蜀を破った司馬懿の業績は、既に朝鮮半島、倭国の国々の外交関係者の間では知られていたであろうから、中国との交易の窓口である公孫氏政権が危ういことで動揺が走ったに間違いない。

238年（景初二年）6月 『魏志倭人伝』では卑弥呼は魏に使者を送る。「景初二年六月倭女王遣大夫難升米等詣郡求詣天子朝獻太守劉夏遣吏將送詣京都」（景初二年六月、倭の女王は大夫難升米等を遣わし郡に至らしめ、天子に詣りて朝獻することを求めてきた。太守劉夏は官吏を遣わし、ひきみ送りて、京都に詣らしむ。）

238年（景初二年）9月、司馬懿は公孫淵を襄平で包囲し、父子を殺害。高句麗東川王は司馬懿に千人の救援を派遣。慕容氏、司馬懿に同行して遼西に定着、勢力を拡大し始める。

238年11月、明帝は卑弥呼に詔書をもって「親魏倭王卑弥呼」と金印紫綬を假授、大夫難升米を卒善中郎将、次使都市牛利を卒善校尉に任じ、銀印青綬を假授。献上品は男生口4人、女生口6人、班布二匹二丈。絳地縹粟罽（ペルシャ絨毯）十張、青絳五匹、紺青五匹、紺地句文錦匹、細班華の毛織物五張白絹五匹、金八両、五尺の刀二口、銅鏡百枚、真珠、鉛丹五十斤。

238年12月 明帝は養子の齊王曹芳を後継者とし、叔父の燕王曹宇を摂政に任命。側近の中書監（書記官長）劉放と中書令の孫資は、明帝に曹宇の解任と曹真の子・曹爽と元老・司馬懿を摂政にしようと画策し、魏の明帝が死去。司馬懿は太傅（最高）顧問と遇されるも、若い曹爽とその側近官僚に実権は移る。司馬懿は長男・司馬師と次男・司馬昭を侍従武官として送り込む。

政権の実権はどこに帰趨するのか、邪馬台国連合や狗奴国、あるいは出雲・丹後等諸国の外交はまたまた混乱したはずである。こうした中で卑弥呼の使者は倭国に折り返す。

240年（正始元年）正月東倭が晋に朝貢（『晋書』宣帝紀正始元年）、鮮卑、焉耆と朝貢。太守の弓遵が使

者を倭に遣わして倭王に任命。金や錦、刀、鏡を下賜。帯方太守弓遵は司馬懿と親しい。この記事は「東の倭」としての邪馬台国なのか、それとも「東倭」という別の国なのか定かではない。新帝の即位に伴うものと見るか、晋の立場で東倭を倭王としたのか不明。

242年、高句麗東川王、鴨緑江下流の西安平（丹東市東北）を攻める

243年（正始四年）の『魏志倭人伝』記事、

「其四年、倭王復遣使大夫伊聲耆、掖邪狗等八人、上獻生口・倭錦・絳青[糸兼]・緜衣・丹・木[犬付]・短弓矢。掖邪狗等壹拜率善中郎將印綬」（正始四年、倭王はまた使者である大夫・伊聲耆、掖邪狗等八人を遣わし、生口（奴隸）・倭錦・絳青[糸兼]・緜衣・丹・木[犬付]・短弓矢を献上した。掖邪狗等は一に率善中郎將の印綬を拝す）倭王は（帯方郡太守弓遵を通じて）大夫の伊聲耆と掖邪狗ら8人を遣わし生口・倭錦・絳青縑・布帛・丹・短弓矢を献上、掖邪狗らは卒善中郎將と印綬を拝した。ここでも卑弥呼と書かずに倭王としている。陳寿はなぜこれを書き分けたのか。あたかも倭王が二人いたのではないかとも思えるのだが。この頃、極東では毌丘儉と高句麗東川王が熾烈な戦闘中。司馬懿が公孫氏を滅ぼすとき、高句麗東川王は援軍を出しているが、幽州刺史毌丘儉は東川王と戦っているのである。

243年12月、倭の女王卑弥呼が（魏の毌丘儉を通じて）魏に使者を遣わして献上品を奉じた。このあたりから、公孫氏滅亡後の商業利権をめぐる、遼東や韓半島での抗争が続くようになる。建国したばかりの高句麗の動きが激しく、倭国も大きな影響を受けたはずなのである。

245年3月東川王19年条（高句麗本紀）「東海の人が美女を獻じて後宮に入れた」東倭は東川王に美女だけでなく援軍も送ったのではないか。滅を追われた。朝鮮の歴史書『三国史記』（注3-3）

245年、『魏志倭人伝』に「倭に詔を賜り、難升米に黄幢が郡（王頡）に付して仮授された」。『魏志倭人伝』は王頡が毌丘儉のために邪馬台国と連絡を取って、連携を図った。難升米に黄色い旗を与えたということは、軍を動かす將軍という意味でもある。

245年10月、東川王、辰韓(毌丘儉側)の北辺を攻撃。（「高句麗本紀」）毌丘儉と邪馬台国・難升米は同盟の確認。

246年8月、幽州刺史の毌丘儉は玄菟郡太守・王頡と兵1万で高句麗攻略、沸流水で合戦し丸都を攻略落城。東川王は妻子と嶺東の濊の不耐王の元へ逃げる。冬10月毌丘儉は丸都城を攻略、王頡に東川王を追撃させ、東川王は竹嶺に南下、買溝の北沃祖に逃亡、王頡軍は追跡し記念碑を残す。（高句麗本紀）『三国史記』『百濟本紀』によれば、毌丘儉、楽浪郡太守・劉茂、朔方（内蒙古自治区の地方名）太守王遵が高句麗を攻めるとある。ここの朔方は帯方の誤り、王遵も弓遵であろうと訳者は注記している。

246年8月、毌丘儉と楽浪郡太守・劉茂が帯方郡太守・弓遵と馬韓の臣漬沽国を攻め、弓遵は殺害されたという。小林恵子によれば劉茂は実は毌丘儉側だったという。辰韓でなく馬韓の臣漬沽国、実際には馬韓

8国を楽浪郡に編入しようとしたか、弓遵を殺したのは毋丘儉ではないか。

247年2月東川王は南平壤を去り、辰韓の于老を破り、南平壤（長寿山城）に城をつくり定着（「高句麗本紀」）。半島に詳しい司馬懿側の帯方郡太守・弓遵は東川王を軍事的に支援したのだろうと小林恵子は言う。毋丘儉は司馬懿と親しい東川王が半島に定着することに危機感を感じた。楽浪郡太守・劉茂は楽浪郡が半島を支配した事を根拠に、辰韓8国を分割して楽浪郡に編入。（『魏書』「東夷伝」）毋丘儉側は半島南部の確実な支配をもくろんだ。辰韓の臣智たちが楽浪編入に反発して、劉茂・弓遵に反乱し弓遵は殺害されたという。

247年（正始8年）王頎が帯方郡太守に着任。王頎は遼東半島土着の漢人で、その子孫は五胡十六国時代に活躍。

247年（正始八年）『魏志倭人伝』では

「其八年太守王頎到官倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和遣倭載斯烏越等詣郡説相攻撃狀遣塞曹掾史張政等因齎詔書、黃幢、拜假難升米為檄告諭之」（其八年、帯方太守の王頎が官に赴任した。倭女王卑彌呼は狗奴國の男王・卑彌弓呼と元々不和であった。そこで倭の載斯と烏越等を派遣して、帯方郡に至り、邪馬台国と狗奴国が相攻撃している状態を説かせた。帯方郡は塞曹掾史・張政等を遣わして因って詔書、黄幢をもたらし、難升米に拜仮し檄文を作って之に告諭した。）

とある。卑弥呼の使者が帯方郡に到着したのは、帯方太守の弓遵が戦乱で殺され、新任の太守王頎が帯方に到着した時であった。おそらく高句麗東川王の背後に東倭・狗奴国がいるとみて、帯方郡太守王頎は張政を派遣したのであろう

張政は長城守備隊の曹掾史であって、地位は低いがおそらくは戦略家としての実力を期待されて倭国に派遣されたのだと思う。

『冊府元龜』卷九百六十八外臣部朝貢第一部に、

「八年、倭国の女王である壹与は、大夫掖邪狗たちを派遣して（洛陽）の尚書台に至らせ、男女の生口三十人を献上し、白珠を五千枚・青大句珠を二枚・異文雜錦を二十四、朝貢した」

と書いてある事を指摘、張政はその年の内に帯方郡に凱旋したことがわかる。以下に述べる張政の功績は短時間に成し遂げられたようだ。「為檄告諭之」に着目して、「来朝した郡使が檄をつくって難升米に告げ諭した結果、卑弥呼が死亡した」と読んだのは、市民研究家の阿部秀雄氏である。昭和46年『卑弥呼と倭王』（注4-8）の中で発表している。確かに素直に読んでいけばそうなる。「檄」とは尺二寸の木簡に書かれた文書だが、ここでは軍令書的な意味があるのではないか。

（ここから吉備邪馬台国東遷説による私見）

帯方郡において何が議論されたのか。おそらくは張政に全権委任されたのではないか。現地の情勢を見たらうで適切な指示を出せということだろう。しかし当然軍事的には、卑弥呼側の形勢は悪いわけであるから、最悪の場合は邪馬台国女王卑弥呼の退位、すなわち倭国王の交代ということは議論されたであろう。狗奴国との講和に持ち込んで、邪馬台国、狗奴国ともに帯方郡の影響下に置ければ、帯方郡として

は大成功というわけだ。

政治軍事顧問の張政を受け入れる邪馬台国側にしても、究極は狗奴国との講和であったはずで、軍事的勝利まで持ち込めるとは思っていたはずはない。また張政側には当然別ルートでの狗奴国とのパイプがあったはずであり、邪馬台国側でもそのパイプに期待していたはずである。ここで大事な視点は、政治的には既に卑弥呼に実権はなく、軍事が優先になっており、倭国の軍事権は黄幢を持つ難升米にあったということだ。卑弥呼は倭国統一に失敗しつつあり、これは失政でもある。

吉備に到着した張政はさっそく難升米を含めた現地司令官たちと現状を分析したに違いない。戦いが続く中で、一方で張政は別パイプを使って狗奴国との交渉をスタートさせる。この時もしや小林恵子のいうように東倭が別途魏に使節を派遣していて、それが掖邪狗達なら、掖邪狗との交渉もあったろう。

この時大事なのは、邪馬台国の連合政権的性格を考慮しておくことである。難升米はひょっとして北九州の「奴国」の王ではないかとの説もある。また吉備邪馬台国と狗奴国の間にある、直接の戦場たる播磨、讃岐などの意向も無視できまい。投馬国はどう出るかも重要だったに違いない。(以上私見)

この頃、鮮卑族が騎馬文化を半島にもたらしていたことは確実で、また辰王の下には既に騎馬文化も入っていただろう。辰王は馬形帯鉤を製造していたのではないか。辰王が倭国に馬形帯鉤をもたらしていたかもしれない。この時期の吉備にもたらされていたとしたら、榊山古墳周辺すなわち楯築遺跡や鯉食神社のすぐ側にもたらされていた可能性もある。

また倭国に派遣された張政は武官であり、当然馬に乗っていたし、馬での交戦経験もあっただろう。辰王でなくとも、張政らが倭国に馬形帯鉤をもたらした可能性もある。

6.馬具専門家たちの意見

ここで「騎馬文化と古代のイノベーション」(2016年角川文化振興財団)の中で、この馬形帯鉤について触れているのを紹介しよう。基調報告「日本列島の初期の馬具」の中で、福岡大学の桃崎祐輔教授は、榊山古墳出土の三燕の馬具について、

「榊山古墳の年代は五世紀前半頃で、鮮卑や金官加耶の出土遺跡とは半世紀余りの差があります。大成洞91号墳を見て思ったのは、四世紀中葉に金官加耶にもたらされた慕容鮮卑の馬具が五十年ほど伝世し、西暦400年以降に日本列島に渡ってきたと考えなければ、時間差が説明できないという点です。それまで馬具や騎馬技術の流出を規制していた金官加耶が、高句麗好太王の南進で大打撃を受け、支配者層の亡命などで倭に四世紀の鮮卑馬具が入ったのではないかと考えています。」

榊山古墳の多孔鈴や龍紋透彫金具は扶余や鮮卑、金海などで出ている馬型帯鉤については、「これが日本に来た経緯を弥生文化の脈絡で捉えるか、古墳時代の前期後半の脈絡で捉えるかで歴史的評価も変わってきます。」

と、大胆に踏み込んで書いている。従来単に新羅で馬形帯鉤が出ているというだけでなく、辰王との関係が推論できる中で、俄然邪馬台国時代のものである可能性が検討され始めている。さらにこの基調報告のあとの討論では、徳島大学名誉教授の東潮は、

「私自身はあくまで騎馬文化そのものを、馬具や騎馬戦術といった側面で捉えています。倭人が最初に見た騎馬は魏の遣いであつたと思います。」

東潮はまた、この本の中の討論では、

「最近、宮内庁で所蔵されている馬形帯鉤と龍紋透彫金具の実測図が報告されました。馬形帯鉤は騎馬民族説の傍証として挙げられていました。馬形帯鉤は三世紀から四世紀代のものですので、五世紀代に渡来したということについては疑問でした。晋式帯金具は帯方郡から狗耶韓国を通じて邪馬台国の新山古墳に入って、馬形帯鉤と三燕馬具も狗耶韓国を通じて投馬国の榊山の地に流入したといえます。五世紀の榊山古墳の出土品ではないと思っています。」

とやはり、一步踏み込んで邪馬台国時代の流入の可能性について語っている。

現時点で馬形帯鉤の流入経緯を確実に判断する材料は不足しているが、造山古墳造営後の吉備勢力が、日本書紀雄略記に吉備田狭が新羅に通じたなどの記事、あるいは弟君の遠征、また任那日本府での吉備臣の活動を考えれば、様々な流入経緯の可能性について、考慮しておく必要があるだろう。

(下図 「邪馬台国の考古学」2012年、角川選書、東潮)

